

週6フリーター、お客さまの怒りを、買う

眞喜屋 実行（まきや さねゆき）

1話、じいさんは「いきものがかり」？の巻（前編）

「はやく18時にならんかな～。まだ3時間もあるよ」

カフェのレジカウンターの中、八本広幸はひじにアゴをのせている。
となりでは、後輩の竹田が洗い終わったグラスをせっせと並べていた。

「あと少しでハンターランク6になるんだ。すげえだろ」

「先輩、ハマってますね～。モンハン」

「あと30分か、今日もなげえな～」

「そういえば、あのおじいさん、最近よく来ますよね」

竹田が店の奥の方に顔を向ける。そこでは白髪の老人がイヤフォンをつけて頭を前後に揺らしながら、本をめくっていた。



「ん、そう？」

「そうですよ～。この2週間くらい毎日来てますよ。いつもあの一番奥の席、朝から閉店までコーヒー1杯っす」

「ふ～ん。じゃ知らんわ。オレ、10時入りの18時あがりだし。店の奥なんて見ねえし」

「あのおじいさんは結構ジロジロ見てくるんすよ、なんか気持ち悪くて」

「いいじゃん。ほっとけば。それよりこれあげるよ」

八本は、竹田の前に一粒の黒いカタマリを置いた。

「なんすか？ これ」

「オレのはなくそ」

「だあ～！ やめてくださいよ！」

「あっはははは！ その顔、その顔。チョー楽しい～」

「もう、やめて下さいよ～！ あ、先輩」

竹田が入口の方に注意を向ける。

よく見かけるサラリーマン3人組が入口をくぐってくるところだった。

「あ〜。来ちゃった。どうせみんなアイスコーヒーなんだからさ。このタンクを表に出しときゃいいのにね。そう思わん？」

「ちゃんと、接客してくださいよ」

「はいはい。いらっしゃいませ〜」

しばらく時間は過ぎ、入口のガラス戸の外はうす暗くなっていた。

「あと5分か、もういい？」

「ダメっすよ。ちゃんと時間までお願いします」

「いいじゃん、どうせヒマなんだしさ」

「あ」

「ん？」

竹田が店の奥の方を見る。

「あのおじいさん」

「じいさん？ あ、立ちあがってる。便所か」



先ほどの老人は、コーヒーカップを左手に持つと、右手で杖をつきよろよろとカウンターの方に

向かって歩きだした。

「おそっ！　じいさんになるとあんなに遅くなるのか。オレの一步分を進むのに10歩くらい歩いてんじゃん」

「先輩！　聞こえますよ」

「大丈夫だよ。どうせ耳悪いだろうし」

老人はコーヒーカップを返却口におくと、足を出口へ向ける。そしてまた、よろよろと足を進めた。

老人が二人の前を通りすぎようとした時、

「ありがとうございます～！」

八本がいつもは出さないくらいの大きな声を出した。

「先輩　いつもより声大きいじゃないっすか」

「このくらい言わないと聞こえないだろ、ははは」

すると、2人の前を通りすぎた辺りで、老人の足がぴたりと止まった。後ろ姿だが、肩がぶるぶると震えているのが分かる。

「どうしたんでしょう？」

「休憩だろ。あそこからいっぱい歩いたからな、はは」

八本がそう口にした瞬間、老人はぼっと振り返り、ついていた杖を高く振り上げ、勢いよく八本の顔の前に指した。

「な、なに…」

「おぬし、いま何と言った？」

まずい、聞こえてしまったのかもしれない。

老人のくいしばった口元がぶるぶると震えている。

「あ、ありがとうございます、と…」

老人は遅い足で八本に寄る。そしてカウンターギリギリに着き、八本の顔をじ～と覗き込んだ。

「おぬし、嘘をついているな」

